

ヴェーダ文献における *karmā́ra-* と パーリ聖典における *kammā́ra-*

——「鍛冶屋」考——

光華女子大学真宗文化研究所特別研究員

山 田 智 輝

0. はじめに

本稿の目的は、ヴェーダ文献¹並びにパーリ聖典に登場する「鍛冶屋」を文献学的に検証することにより、往時の金属生産の担い手の実像を浮き彫りにすることである。筆者はこれまでに、ヴェーダ文献における卑金属類（2018）及び貴金属類（2019）に関する研究を既に遂行した。それらの研究を通じては、紀元前一千年紀の南アジアにおける金属利用の変遷について、包括的に検証した。しかしながら、ヴェーダ文献を伝えた往時のインド・アーリヤ人の社会において、冶金技術はその伝統の外部に位置する人々によって担われていたものと考えられ²、それ故、金属に関わる言及は、必然的に限定される傾向にある。

この現状を踏まえ本稿では、ヴェーダ文献のみならず、時代的にはヴェーダ文献より幾らか下るが、物質文化に関わる具体的な記述を数多く伝えるパーリ聖典をも対象とし、「鍛冶屋」について文献学的検証を行う。後代の文献から看取される鍛冶屋に関わる具体的な言及を、ヴェーダ文献理解に補完的に用いることにより、紀元前一千年紀における鍛冶屋のイメージの把握を試みる。

1. ヴェーダ文献における *karmā́ra-* 「鍛冶屋」

*karmā́ra-*³ は、ヴェーダ文献及び後代の文献において、「鍛冶屋」の意で用い

られる一般名詞である。ヴェーダ文献中に全 13 回の用例があるが、パラレルを除外すると、用例数は 5 種に留まり、散文には事実上用例が無い。

1.1. RV における *karmāra-*

RV X 72,2 *brāhmaṇas pátir etá¹ sám karmāra ivādhamat*

ブラフマンの主がこれらを、鍛冶屋が、のように、溶融した。

【解説】当詩節に言及される *sám-dhmā* 「溶融する」という表現は、具体的には「鞴を使って風を吹きかけて、坩堝の中で原材料を溶かし合わせる、完全に溶融する」の意である。一連の冶金作業中の、「鞴 (*dṛti*-「革袋」を用いる) で吹く」という最初の特徴的行程を意味する単語 *dhmā* 「吹く、吹きかける、風を送る」によって、後続する作業工程全体を表す語法の一つである⁴。RV の段階において、既に冶金技術がある程度発展していたことを示唆する用例に位置付けられる。

RV IX 112,2 *járatūbhir ósadhībhiḥ¹ parṇébhīḥ śakunān.ām*

kārmāró áśmabhir dyúbhir¹ hiraṇyavantam ichatī⁻¹ Indrāyendo pári srava||

古い益草たちと共に、鳥たちの羽達と共に、

鍛冶屋は、石たちと共に、日々と共に (?), 貴金属を持つものを探し求める。

Indra のために、滴よ、巡り流れよ。

【解説】Rau (1974), p.32 f. は、当詩節 a の「古い益草たち」を「アミュレットのパーツ用の木」と、d の「貴金属を持つものを探し求める」を「金細工を依頼する者 (顧客)」とそれぞれ解し、当詩節に言及される鍛冶屋が、特に「金鍛冶屋」であると指摘する。しかしながら、*hiraṇyavant-*という語は、他所では常に牛、馬、戦利品といった語と共に言及される⁵ ことに鑑みると、当箇

所は「裕福な依頼者を探し求める鍛冶屋」を描くものと解釈すべきであろう。

1.2. AVŚ, AVP 及び YVS における *kārmārā-*

AVŚ III 5,6 *yé dhītvāno rathakārāḥ¹ karmārā yé manīṣiṇaḥ¹*

upastīn parṇa máhyaṃ tvam¹ sárvān kṛṇv abhīto jánān||

思慮深い戦車職人であるところの者達、意図を備える鍛冶屋たち
であるところの者達、

[そのような] 部下達を、全ての人民達を、parṇa よ、君は私のため
に、両側になせ。

AVP III 13,7 *ye takṣāṇo rathakārāḥ¹ karmārā ye manīṣiṇaḥ¹*

sarvāṃs tān parṇa randhayo-¹ „pastim kṛṇu me janam||

大工達、戦車職人達であるところの者達、意図を備える鍛冶屋達
であるところの者達、

そのような全ての者達を、parṇa よ、君は服従させよ。人民を私
の部下と君はなせ。

【解説】 AV における用例では、鍛冶屋は、戦車職人 (*rathakārā*) らと共に言及され、「意図を備えた」 (*manīṣin-*) と肯定的に形容されている。

MS II 9,5 : 124,5-8^m~KS XVII 13 : 256,14-17^m~KpS XXVII 3 : 134, 1-3^m~TS
IV 5,4,2~VSM 16,27 VSK 34,1

*nāmo brāhmaṇēbhyo rājanyēbhyāś ca vo nāmas. nāmaḥ sūtēbhyo viśyēbhyāś ca
vo nāmas. nāmas tākṣabhyo rathakārēbhyāś ca vo nāmas. nāmaḥ kulālebhyāḥ
karmārebhyāś ca vo nāmas. nāmo niṣādēbhyāḥ puñjīṣṭebhyāś ca vo nāmas. nāmaḥ
śvāntibhyo mṛgayūbhyāś ca vo nāmas. nāmaḥ śvābhyāḥ śvāpatibhyāś ca vo nāmas.*

バラモン達に敬意あれ、そして君達、王族達に敬意あれ。御者達に敬意あれ、
そして君達、居住民達に敬意あれ。木工達に敬意あれ、そして君達、戦車
職人達に敬意あれ。陶工達に敬意あれ、そして君達、鍛冶屋達に敬意あれ。

niṣāda 達⁶に敬意あれ、そして君達、漁師 (?)⁷達に敬意あれ。犬たちに敬意あれ、そして君達、犬使い達に敬意あれ。

VSM XXX,7=VSK XXXIV,1,7~TB III 4,3,3

*tāpase kaulālāṃ māyāyai karmāram^o rūpāya maṇikārām^o śubhé vapām^o śaravyāyā
iṣukārām^o hetyāi dhanuṣkārām kārmaṇe jyākārām diṣṭāya rajjusarjām mṛtyāve
mrgayūm āntakāya śvaninam ||*

熱のために、陶工の息子を [柱に括る]。計算力のために、鍛冶屋を。美しい姿のために、宝石職人を。立派さのために、種を蒔く者を。射ることのために、矢職人を。射撃のために、弓職人を。作用のために、弦職人を。指示のために、綱作り職人を。死のために、獵師を。最期のために、犬使いを。

VSM XXX 17=VSK XXXIV 3,4

... bībhatsāyai paulkasām vārṇāya hiraṇyakārām tulāyai vāñijām. . .

... 嫌気のために、[彼は] Pulukasa に属する男を [柱に] 縛る。色のために、[彼は] 金細工職人を [柱に] 縛る。秤のために、[彼は] 商人を [柱に] 縛る...

【解説】鍛冶屋は、戦車職人 (*rathakāra-*) や陶工 (*kilāla-*) 等の、様々な技術者・専門職の者と並置される。さらに VSM XXX,7 他においては、「計算力 (*māyā-*、即ち高度な技術力)」⁸ と関連づけられる。

上記の MS II 9,5 他の例に言及される戦車職人 (*rathakāra-*) は、インド・アーリヤの伝統外に位置する階級としてはシュードラであるにもかかわらず、王室にさえも影響力を持つ者 (*ratnīn-*) としてしばしば描かれる。さらには他のシュードラが祭式構造の枠外に置かれていたのに対し、彼らだけは自身の祭火を敷設する権利を与えられており、最下層カーストに属する者としては格別の社会的地位を約束されていたとされる⁹。武器や日用品の製作に関わる鍛冶屋も、戦車職人と同様に、ある程度の待遇を以て扱われていたのかもしれない。この点は、後段のパーリ文献における用例においても看取される (→2.1. 及び 2.3.)。

他方、VS では、後続する箇所において、*hiranyakāra*-「金細工職人」が、他の様々な職人と並んで、*karmāra*-とは別に言及される。この段階では、貴金属類の冶金は、他の金属のそれとは異なる職能に位置付けられていた可能性が考えられる。

2. Pāli 聖典における *kammāra*-

Pāli 聖典においては、ヴェーダ文献とは異なり、*kammāra*-及びその複合語については、比較的多くの用例が見出される。本稿では鍛冶屋の具体的な姿を伝える用例に特に着目し、原典を検証する。

2.1. 鍛冶屋の息子 Cunda

Dīghanikāya XVI 4, 14-20 (II pp.126-128)

14. *Assosi kho Cundo kammāra-putto* : ‘*Bhagavā kira Pāvaṃ anuppatto Pāvāyaṃ viharati mayhaṃ ambavane*’ *ti. Atha kho Cundo kammāra-putto yena Bhagavā ten’ upasaṃkhami, upasaṃkhamitvā Bhagavantaṃ abhivādetvā ekamantaṃ nisīdi, ekamantaṃ nisinnaṃ kho Cundaṃ kammāra-puttaṃ Bhagavā dhammiyā kathāya sandassesi samādapesi samuttejesi sampahaṃsesi.*

15. *Atha kho Cundo kammāra-putto Bhagavatā dhammiyā kathāya sandassito samādapito samuttejito sampahaṃsito Bhagavantaṃ etad avoca* : ‘*Adhivāsetu me bhante Bhagavā svātanāya bhantaṃ saddhiṃ bhikkhusaṃghenāti.*’ *Adhivāsesi Bhagavā tuṅhī-bhāvena.*

16. *Atha kho Cundo kammāra-putto Bhagavato adhivāsanaṃ viditvā, utṭhāy’ āsanā Bhagavantaṃ abhivādetvā padakkhiṇaṃ katvā pakkāmi.*

17. *Atha kho Cundo kammāra-putto tassā rattiyaṃ accayena sake nivesane {paṇītaṃ} khādaniyaṃ bhojaniyaṃ paṭiyādāpetvā pahūtañ ca sūkara-maddavaṃ Bhagavato kālaṃ ārocāpesi* : ‘*Kālo bhante niṭṭhitaṃ bhattaṃ*’ *ti.*

18. *Atha kho Bhagavā pubbaṅha-samayaṃ nivāsetvā patta-cīvaram ādāya saddhiṃ*

bhikkhu-saṃghena yena Cundassa kammāra-puttassa nivesanaṃ ten' upasaṃkamaṃ, upasaṃkamtivā paññatte āsane nisīdi, nisajja kho Bhagavā Cundaṃ kammāra-puttaṃ āmantesi : 'Yan te Cunda sūkara-maddavaṃ paṭiyattaṃ, tena maṃ parivisa, yaṃ pan' aññaṃ khādaniyaṃ bhojaniyaṃ paṭiyattaṃ, tena bhikkhu-saṃghaṃ parivisāti.' 'Evaṃ bhante' ti kho Cundo kammāra-putto Bhagavato paṭissutvā, yaṃ ahosi sūkara-maddavaṃ paṭiyattaṃ, tena Bhagavantaṃ parivisi, yaṃ pan' aññaṃ khādaniyaṃ bhojaniyaṃ paṭiyattaṃ tena bhikkhu-saṃghaṃ parivisi.

19. *Atha kho Bhagavā Cundaṃ kammāra-puttaṃ āmantesi : 'Yan te Cunda sūkara-maddavaṃ avasiṭṭhaṃ, taṃ sobbhe nikhañāhi, nāhan taṃ Cunda passāmi sadevake loke samārake sabrahmake sassamaṇa-brāhmaṇiṃ paṭijāya sadeva-manussāya yassa taṃ paribhuttaṃ sammāpariṇāmaṃ gaccheyya aññatra Tathāgatassāti.' 'Evaṃ bhante' ti kho Cundo kammāra-putto Bhagavato paṭissutvā, yaṃ ahosi sūkara-maddavaṃ avasiṭṭhaṃ taṃ sobbhe nikhañitvā, yena Bhagavā ten' upasaṃkamaṃ, upasaṃkamtivā Bhagavantaṃ abhivādetvā ekamantaṃ nisīdi, ekamantaṃ nisinnaṃ kho Cundaṃ kammāraputtaṃ Bhagavā dhammiyā kathāya sandassetvā samādapetvā samuttejetvā sampahaṃsetvā utṭhāy' āsanā pakkāmi.*

20. *Atha kho Bhagavato Cundassa kammāra-puttassa bhattaṃ bhuttāvissa kharo ābādho uppajji lohita-pakkhandikā pabāḷhā vedanā vattanti māraṇantikā. Tā sudaṃ Bhagavā sato sampajāno adhvāsesi avihaññamāno. Atha kho Bhagavā āyasmantaṃ Ānandaṃ āmantesi : 'Āyāmaṃ Ānanda yena Kusinārā ten' upasaṃkamissāmāmi.' 'Evaṃ bhante' ti kho āyasmā Ānando Bhagavato paccassosi.*

Cundassa bhattaṃ bhujjivā kammārassāti me sutamaṃ

Ābādham samphusī dhīro pabāḷhaṃ māraṇantikaṃ.

Bhuttassa ca sūkara-maddavena

Yyādhi ppabāḷhā udapādi Satthuno.

Viriccamāno Bhagavā avoca

Gacchāmaṃ ahaṃ Kusināraṃ nagaraṃ ti.

鍛冶屋の息子 Cunda は聞いた。「世尊は Pāvā¹⁰ に到着した。Pāvā で私のマ

ンゴの園に滞在している」と。そこで鍛冶屋の息子 *Cunda* は世尊がいる方向に進んだ。進んでから世尊に丁寧に挨拶して、側に座った。側に座った鍛冶屋の息子 *Cunda* に世尊は *dharma* に属する言葉によって啓発し、刺激し、煽り、喜ばせた。(14)

そこで鍛冶屋の息子 *Cunda* は世尊によって、*dharma* に属する言葉によって啓発され、刺激され、煽られ、喜ばされて、世尊に次のようなことを言った。「留まって下さい、私の主よ、世尊は明日、食事を一緒に比丘の一段と共に」と。世尊は黙って留まった。(15)

そこで鍛冶屋の息子 *Cunda* は世尊の滞在を知って、座から立ち上がり、世尊に語りかけて、右回りに回って、歩を進めた。(16)

そこで鍛冶屋の息子 *Cunda* は、その夜の終わりに自分の居場所で、素晴らしい噛まれるべきもの（堅い食べ物）、享受されるべきもの（柔らかい食べ物）、そしてたくさんの *sūkara-maddava*（豚の柔らかい煮／キノコ料理）(?) を準備して、世尊に「食事」時を知らせた。「準備のできた食事の時である、主よ」と。(17)

そこで世尊は朝に、衣を纏って、鉢と服を取って、比丘の集団と共に、鍛冶屋の息子 *Cunda* の住居へと赴いた。赴いてから、示された座に座った。座った世尊は鍛冶屋の息子 *Cunda* に話しかけた。「*Cunda* よ、君が準備した *sūkara-maddava* を私に与えよ。その準備された食べ物を、噛まれるべきもの（堅い食べ物）、享受されるべきもの（柔らかい食べ物）、それによって比丘の集団に与えよ」と。「そのように、あなた様」と鍛冶屋の息子 *Cunda* は世尊に同意して *sūkara-maddava* が用意された状態となったところのもの、それを世尊に与えた。そして準備された食べ物、噛まれるべきもの（堅い食べ物）、享受されるべきもの（柔らかい食べ物）であるところのもの、それを比丘の集団に与えた。(18)

そして世尊は鍛冶屋の息子 *Cunda* に語った。「*Cunda* よ、君が残した *sūkara-maddava* であるところのもの、それを穴に埋めよ。私はそのような者を *Cunda* よ、見ない、神を伴う世界において、死を伴う世界において、ブラフマンを伴

う世界において、行者とバラモンの中で、生物において、神と人間を伴うものにおいて、者の中で、それを食して、完全な消化へと向かうであろう者を、如来以外に」と。「仰せの通りに」と、鍛冶屋の息子 Cunda は世尊に同意して、sūkara-maddava が残ったものとなったところの、それを穴に埋めて、それによって世尊に近づいた。近づいてから世尊に語りかけて、一隅に座った。一隅に座った鍛冶屋の息子 Cunda を世尊は法を備えた言葉によって啓発し、刺激し、煽り、喜ばせて、座から立ち上がり、出発した。(19)

さて、鍛冶屋の息子 Cunda の食事を食べた者である世尊には、激しい痛みが生じた。赤痢が、死に至る、激しい感覚が見出された。それを世尊は考えて、完全に認識して、恐れることなく耐えていた。そこで世尊は Ānanda 尊者に語りかけた。「来い、Ānanda よ、そこを通って Kusināra¹¹ にいたる、そこを
通って私は行くだろう」と。「分かりました、あなた様」と Ānanda 尊者は世尊に答えた。「鍛冶屋の息子 Cunda の食べ物を食べて」と私は聞いた。賢者は、死に至る激しい痛みに苛まれた。食べ物の中の sūkara-maddava によって、先生に激しい病が生じた。自らを清めながら、世尊は言った。「私は Kusināra の街に行く」と。

【解説】 仏陀の死の前に起きたことを伝える一節である。個々の内容、特に食事の内容については、中村（1980）による研究史をも含む子細な解説に譲る。彼が指摘するように、往時の鍛冶屋の中には、仏陀を供応する程に裕福な者達がいたことが推察できる。

Aṅguttaranikāya CLXXVI 1 (V p.263 f.)

Ekam samayaṃ Bhagavā Pāvāyaṃ viharati Cundassa kammāraputtassa ambavane. Atha kho Cundo kammāraputto yena Bhagavā ten' upasaṅkami, upasaṅkamitvā Bhagavantaṃ abhivādetvā ekamantaṃ nisīdi. Ekamantaṃ nisinnaṃ kho Cundaṃ kammāraputtaṃ Bhagavā etad avoca 'kassa no tvaṃ Cunda soceyyāni rocesī' ti? 'Brāhmaṇā bhante pacchābhūmakā kamaṇḍalukā sevālamālakā aggiparicārīkā

udakorohakā soceyyāni paññāpentī, tesāhaṃ soceyyāni rocemī’ ti. ‘Yathākathaṃ pana Cunda brāhmaṇā pacchābhūmakā . . . soceyyāni paññāpentī’ ti? ‘Idha bhante brāhmaṇā pacchābhūmakā . . . , te sāvakaṃ evaṃ samādapenti ‘ehi tvam ambho purisa kālass’ eva vuṭṭhahanto ‘va sayanamhā paṭhavim āmaseyyāsi ; no ce paṭhavim āmaseyyāsi, allāni gomayāni āmaseyyāsi ; no ce allāni gomayāni āmaseyyāsi, haritāni tiṇāni āmaseyyāsi ; no ce haritāni tiṇāni āmaseyyāsi, aggiṃ paricareyyāsi ; no ce aggiṃ paricareyyāsi, pañjaliko ādiccaṃ namasseyyāsi, no ce pañjaliko ādiccaṃ namasseyyāsi, sāyatīyakam udakam oroheyyāsi’ ti. ‘Evaṃ kho bhante brāhmaṇā pacchābhūmakā . . . soceyyāni paññāpentī, tesāhaṃ soceyyāni rocemī’ ti. ‘Aññathā kho Cunda brāhmaṇā pacchābhūmakā . . . soceyyāni paññāpentī, aññathā ca pana ariyassa vinaye soceyyaṃ hotī’ ti. . .

ある時、世尊は Pāvā の、鍛冶屋の息子の Cunda のマンゴー園に滞在していた。そこで、鍛冶屋の息子の Cunda は、世尊に近づいた。近づいてから、世尊に語りかけてから、一隅に座った。一隅に座った鍛冶屋の息子の Cunda に、世尊は次のように語った。「君は、Cunda よ、今、誰の清浄さ¹²たちを、喜ぶのか」と。「友よ、西方を拠点として持つ、水差し (*kamaṇḍalu*-¹³) を使う、*sevāla*¹⁴ を衣に持つ、火を世話する、沐浴するバラモン達¹⁵、清めたちを知らしめている。彼らの清めたちを、私は喜ぶ」と。それでは、Cunda よ、どのようにして、西方を拠点として持つ (中略) バラモン達は清めたちを知らしめているのか」と。「ここで、友よ、それらの西方を拠点として持つ (中略) バラモン達は聞き手をこのようにして受け入れさせる。『さあ、君は来い、男よ、早朝に、ベッドから起き上がりつつ、君は大地に触れるべきである。もし大地に君達が触れないなら、湿った牛の糞たちに君は触れるべきである。湿った牛の糞たちに君が触れないなら、黄色の草たちに君は触れるべきである。黄色の草たちに君が触れないなら、火を君は世話するべきである。火を君が世話しないなら、*añjali* を前に出す者 (*prāñjalika*) として、太陽を敬うべきである。*añjali* を前に出す者として、太陽を敬わないなら、夜に三度、君は水 [場] へと降りるべきである』と。このように、友よ、西方を拠点として持つ (中略)

バラモン達は清めたちを知らしめる。彼らの清めを、私は喜ぶ」と。「西方を拠点として持つ（中略）バラモン達は、異なるやり方で清めを知らしめている、Cunda よ。しかし、ariya の規律（vinaya）において、清めは異なるやり方で存在している」と。

【解説】上記の DN の用例において、仏陀が Cunda に語った具体的内容に相当する部分と思われる。教義に関わる長い議論が後続するが、本稿の趣旨に関わりが薄いため、割愛する。鍛冶屋の Cunda が「西方を拠点として持つバラモン」を崇拜していると語る点が注目に値する。具体的にいつの時代のどのような宗教的背景を持つバラモンが含意されているのかについては不明であるが、言及される個々の内容の幾つかについては、ヴェーダ文献に遡り得る要素が見出される。

まず「西方を拠点に持つバラモン達」の特徴について、火の世話や沐浴は、ヴェーダ祭式において散見される要素である。kamaṇḍalu-はヴェーダ文献には複合語を含め4度例証される。新満月祭で使用される水差しで、シュラウタースートラでは比較的用例は多い¹⁶。

次に、バラモン達の言及内容について検証する。第一に、祭式における牛糞の使用について、この側面はヒンドゥー儀礼においては一般的であるようだが¹⁷、ヴェーダ祭式においては、例は限定的である。MS IV 2,10:34,1 f. は類例の1つに位置付けることができるかもしれない：MS IV 2,10:34,1 f. *yó váisyaḥ śūdró vā bahupuṣṭāḥ syāt tāsya gāvāṃ goṣṭhād ekaviṃsatim śakāny āhṛtyāi-kaviṃsatim āhutīr juhuyāt* | 「庶民、或いは大いに栄えたシュードラがあれば、その者の牛たちの囲いから21塊の牛糞たちを持ってきてから、21個の献供物たちとして献供すべきである。」当箇所は gonāmika 「雌牛の名付け」という祭式規程の一節である¹⁸。MS と同じ黒 YV 派の TS, KS にパラレルは無く、MS のみが伝承する。ここでは「大いに栄えたシュードラ」について言及されるが、仏陀を供した鍛冶屋である Cunda は、まさにそのような存在に位置付けられるとも言える。

また「黄色い草」は、恐らくヴェーダ祭式で広く利用される敷草 (*barhiṣ*)、草束 (*darbha*) を指すものだろう。植物としては *kuśa*¹⁹ が用いられる。

「*añjali* を前に持つ者 (*prāñjalika*) として、太陽を敬う」という言及については、MS に属する *MānŚrSū* の一節に関連性の一端を見出すことができるかもしれない：*MānŚrSū* II 1,2,6 *sūryāgnī dyāvāpṛthivī iti prāñjalir japati*。『太陽と Agni よ、天と地よ』(MS I 2,2^m[11,3]²⁰) といって、*añjali* を前方に持つ者 (*prāñjali*) は小声でつぶやく。」この箇所は *dikṣā*²¹ の一場面で用いられる *mantra* である。

他方、「*sevāla* (OIA *śīpāla-*) を衣として持つ」という表現は、ヴェーダ文献中には見出されない。ただ、Syed (1992), p.68 ff. によると、水草である *śīpāla* は、川で水浴びをする人の臀部に絡まり、衣服のような役割を果たすものとして描かれることがあるとされる。当箇所の *sevālamālaka-* (*sevāla* を衣として持つ者) も、川や池で沐浴する者を形容する表現と解すべきかもしれない。

「早朝に大地に触れる」、さらには「夜に三度水場に降りる」という記述に該当する要素は、管見の限りはヴェーダ祭式には見出されない。

2.2. 剃髪頭の鍛冶屋

Vinaya I 48,1-2 (I, p.76 f.)

1. *tena kho pana samayena aññataro kammārabhaṇḍu mātāpitūhi saddhiṃ bhaṇḍitvā ārāmaṃ gantvā bhikkhūsu pabbajito hoti. atha kho tassa kammārabhaṇḍussa mātāpitāro taṃ kammārabhaṇḍuṃ vicināntā ārāmaṃ gantvā bhikkhū pucchimsu: api bhante evarūpaṃ dārakaṃ passeyyāthā 'ti. bhikkhū ajānaṃ yeva āhaṃsu: na jānāmā 'ti, apassaṃ yeva āhaṃsu na passāmā 'ti.||I||*

2. *atha kho tassa kammārabhaṇḍussa mātāpitāro taṃ kammārabhaṇḍuṃ vicināntā bhikkhūsu pabbajitaṃ disvā ujjhāyanti khīyanti vipācenti: alajjino ime samaṇā Sakya-puttiyā dussilā musāvādino, jānaṃ yeva āhaṃsu: na jānāmā 'ti, passaṃ yeva āhaṃsu: na passāmā 'ti, ayaṃ dārako bhikkhūsu pabbajito 'ti. assosum kho*

bhikkhū tassa kammārabhaṇḍussa mātāpitunnaṃ ujjhāyantānaṃ khīyantānaṃ vipācentānaṃ. atha kho te bhikkhū bhagavato etam atthaṃ ārocesuṃ. anujānāmi bhikkhave saṃghaṃ apaloketuṃ bhaṇḍukammāyā 'ti.||2||48||

さてあるとき、とある剃髮頭の鍛冶屋が、父母と一緒に口論して、園に行つて、比丘達の間で出家した者となった。そこでその剃髮頭の鍛冶屋の父母は、その剃髮頭の鍛冶屋のことを探しつつ、園に行つて、比丘達に尋ねた。「友よ、このような姿を持つ少年を君達は見るだろう」と。比丘達はまさに知らないの、言つた。「我々は知らない」と。まさに見ていないので、言つた「我々は見えていない」と。(1) そこで、その剃髮頭の鍛冶屋の父母は、その剃髮頭の鍛冶屋を探しつつ、比丘達の間で出家した者(彼)を見てから、怒り、尽き果て、怒る(大いに怒る²²)。「これらの Sakya の息子達である沙門達は、恥知らずで、悪い掟を持ち、嘘つきである。まさに知っているのに彼ら言つた。『我々は知らない』と。まさに見ているのに彼らは言つた。『我々は見えない』と。この少年は、比丘達の間で出家した」と。比丘達は、その剃髮頭の鍛冶屋の父母の大なる怒りを耳にした。そこでそれらの比丘達は、世尊にこの経緯を伝えた。「私は許可する、比丘達よ、教団に、剃髮行為のために許可を尋ねることを²³。」

【解説】鍛冶屋に関する具体的な記述を伝える内容ではないが、先の Cunda の例と同様に、鍛冶屋の家系の者が仏陀の教えに魅力を見出していたことを伝える一例と言える。

2.3. 鍛冶屋の集落

Jātaka VI 2,2 Sūcijātaka. (III, pp.281-283)

... *Atīte Bārāṇasiyaṃ Brahmadaṭṭe rājjaṃ kārente Bodhisatto Kāsiraṭṭhe kammāra-kule nibbattivā vayappatto pariyodātasippo ahoṣi. Mātāpitāro paṇ' assa daliddā. Tesaṃ gāmato avidūre añño saḥassakuṭiko kammāragāmo. Tatha kammārasahas-sassa jeṭṭhakakammāro rājavallabho aḍḍho mahaddhano. Tass' ekā dhītā ahoṣi ut-*

tamarūpadharā devaccharāpaṭibhāgā Janapadakalyāṇilakkhaṇehi samannāgatā. Sāmantagāmesu manussā vāsīpharasuphālapācanādikārāpanatthāya taṃ gāmaṃ gantvā yebhuyyena taṃ kumārikaṃ passanti. Te attano attano gāme gantvā nisinnaṭṭhānādisu tassā rūpaṃ vaṇṇenti. Bodhisatto taṃ sutvā savanasaṃsaggena bandhitvā “pādapari-cārikaṃ taṃ karissāmīti” uttamajātikaṃ ayaṃ gahetvā ekaṃ sukhumāṃ ghanam sūciṃ katvā pāse vijjhitvā oḍake opilāpetvā aparam pi tathārūpaṃ eva tassā kosakaṃ katvā pāse vijjhi, iminā niyāmena tassā sattakose akāsi, kathaṃ akāsīti na vattabbaṃ, Bodhisattānaṃ hi nāṇamahantaṭṭhāya kāraṇaṃ ijjhati. So taṃ sūciṃ nālīkāya pakkhipitvā ovaṭṭīkāya katvā taṃ gāmaṃ gantvā kammārajetṭhakassa vasanāvithiṃ pucchitvā tatha gantvā dvāre ṭhatvā “ko mama hatthato evarūpaṃ nāma sūciṃ mūlena kiṇitum icchatīti” sūciṃ vaṇṇento jetṭhakakammāragharasamāpe ṭhatvā paṭhamaṃ gātham āha :

1 *Akakkasaṃ aphaṛusaṃ kharadhotam supāsīyaṃ*

sukhumaṃ tikhiṇaggaṇ ca ko sūciṃ ketum icchatīti. 84.

Evaṃ ca pana vatvā puna pi taṃ vaṇṇento dutiyaṃ gātham āha :

2 *Sumajjaṇ ca supāsaṇ ca anupubbaṃ suvaṭṭitaṃ*

ghanaghātimaṃ paṭitthaddhaṃ ko sūciṃ ketum icchatīti. 85.

Tasmim khāṇe sā kumārikā bhuttapātarāsaṃ pītaraṃ darathapaṭippassambhanatthaṃ cullasayanake nipannaṃ tālavaṇṇena vijāyamānā Bodhisattassa madhurasaddaṃ sutvā allapiṇḍamaṃsena hadaye pahaṭā viya ghaṭasahassena nibbāpitadarathā viya hutvā “ko nu kho esa madhurena saddena kammāraṇaṃ vasanagāme sūciṃ vikiṇīti, kena nu kho kammaṇa āgato, jānissāmi naṃ” ti tālavaṇṇaṃ ṭhapetvā gehā nikkhamma bahi ālindake ṭhatvā tena saddhiṃ kathesi. Bodhisattānaṃ patthitaṃ nāma samijjhati, so hi tassā yev’ atthāya taṃ gāmaṃ āgato. Sā yeva tena saddhiṃ kathenti “māṇava sakalapaṭṭhāvāsino sūciāḍṇaṃ atthāya imaṃ gāmaṃ āgacchanti, tvaṃ bālāṭṭhāya kammāragāme sūci vikkhetum icchasi, sace pi divasaṃ sūciyā vaṇṇaṃ bhāsissasi na te koci hatthato sūciṃ gaṇhissati, sace mūlaṃ laddhum icchasi aññaṃ gāmaṃ yāhīti” vatvā dve gāthā abhāsi :

3 *Ito dāni patāyanti sūciyo balisāni ca,*

ko 'yaṃ kammāragāmasiṃ sūcī vikketum icchati. 86.

4 *Ito satthāni gacchanti kammantā vividhā puthū,*

ko 'yaṃ kammāragāmasiṃ sūcī vikketum arahaṭṭi. 87.

...かつて、Bārāṇasī で Brahmadatta が王国を支配していたとき、菩薩は Kāsi 国において、鍛冶屋の家系に生まれ変わってから、成長して、優れた技術を持つ者となった。しかし彼の父母は貧しかった。彼らの村から離れていないところに、別の、1000 戸もの小屋からなる鍛冶屋の村があった。そこでは、1000 人もの鍛冶屋達の中の最高の鍛冶屋が、王によって気に入られ、裕福で、巨財を持っていた。彼には、優れた見かけを備えた、天に属する Apsaras のような、その国の美女の特徴たちを備えた、一人の娘があった。周囲に位置する村々において、人々は手斧、斧、犁先、突き棒（家畜を追い立てる際に用いる）などを作らせることの目的のために、その村へ行ってから、その娘を、ほとんど全て、彼らは見る。彼らはそれぞれ自分の村へ行ってから、座り立ち（会合）などにおいて、彼女の美しい姿を説明した。菩薩はそれを聞いてから、聞くことによる接触によってくっついてから、「彼女を足下に仕える者（妻）と私はなすだろう」と [言って]、最上の生まれを持つ鉄を取って、一本の心地よい、しっかりとした針を作ってから、糸において貫いてから、水に浸してから、別の、まさに同様の姿を持つ、それ（針）の容れ物を作ってから、糸において貫いた。この方法によって、それ用の七重の容れ物を作った。どのように作った、というのは、語られるべきではない。菩薩たちの知の偉大さによって、原因が達成されるからである。彼はその針を筒に入れてから、腕輪にしてから、その村へ行ってから、鍛冶屋の長老の家への行き方を尋ねてから、そこへ行って、門の側にたつてから、「誰か、私の手製のこのような姿を持つ針を、根っこによって²⁴ 買うことを望むか」と。針を説明しつつ、長老の鍛冶屋の家の側に立ってから、最初の詩節を述べた。

「雑ではなく、粗がなく、粗さがきれいにされた、supasiya で、繊細で、鋭い先端を持つ針を、誰か買うことを望まないか」と。

そのように述べてから、再び二つ目の偈を述べた。

「良く拭われた、通しやすい、連続する、良く回転する、堅いものを貫くことができる、丈夫な針を、誰か買うことを望まないか。」

その時、その娘は、朝食を終えた、疲れを取るために、ベッドに横になっていた父を、ターラの葉で仰ぎつつ、菩薩の酔わせるような声を聞いて、肉塊によって心臓において打たれたようになって、1000 の水瓶によって不安が吹き消されたようになって、「誰が今、この酔わせるような声で、鍛冶屋達の村において、針を売るのが。何の仕事によって、今、やって来たのか。私は実に知りたい」と、ターラの葉を置き、家から外へ出て、バルコニーに立ってから、彼に言葉を語った。菩薩の望みは、実に達成された。彼はそのために、その村へやって来たから。彼女は彼に言葉を語った。「男よ、国に住む皆が、針などのために、この村にやって来る。君は愚かさによって、鍛冶屋の村において、針たちを売ろうと欲している。たとえ一日、針の素晴らしさを君が語っても、誰も君の手から、針を取らないだろう。もし根（相応の価格）を得ることを君が望むなら、別の村へと君は行け」と語ってから、二つの偈を語った。

「今、ここから売られる、針たちと釣り針たちは。鍛冶屋の村において、ここにいる誰が針たちを売ろうとするのか。」

「ここから剣たちは、行く、様々なたくさんの仕事道具たちは。鍛冶屋の村において、ここにいる誰が針たちを売ろうとするのか。」

【解説】 Macdonell and Keith (1912) I, p.140 f. は、当箇所について論じた R. Fick の先行研究 (1897) を参照し、準カーストとしての鍛冶屋達のギルド組織が、ヴェーダ期に既に存在していた可能性を指摘する。商品としては、手斧、斧、犁先、突き棒といった日用品の他、剣なども広く生産していたことが言及される。手斧 (*vāsi-*) や斧 (*paraśú-*) は、RV 以来卑金属 (*áyas-*) 製のものが知られるが、犁 (*phāla-*) については、金属製のものはヴェーダ文献中には現れない。

成功した鍛冶屋は、王からの寵愛を受けていたことも伝えられ、往時の社会

において、彼らがある程度重要な地位を確立していたことが窺える。

3. まとめ

以上、ヴェーダ文献及びパーリ語聖典に言及される鍛冶屋について、概観した。彼らは、RV の段階からある程度発達した冶金技術を既に持っていたことが窺える。RV 以降のヴェーダ文献においても、相応の敬意を以て扱われていたことが暗示されるが、インド・アーリヤの伝統外に位置する存在については言及が少ない同文献からは、窺い知るための手がかりは必然的に限定されると言わざるを得ない。

他方、パーリ聖典においては、ヴェーダ文献中には語られなかった、鍛冶屋の実像を伝える言及が散見される。Cunda に関わる記述からは、鍛冶屋がバラモン教の伝統の中に組み込まれていた可能性が暗示される。Cunda が語るバラモンの素性については判然としない点も残されるが、幾つかの要素はヴェーダ祭式の中に、対応するとも考えられる要素が看取される。さらにそれらの幾つかは、特にシュードラに関わる祭式行程であるという点には、注目しても良いかもしれない。

ジャータカの用例からは、様々な金属製品の生産を担う鍛冶屋の集落について言及され、彼らは王からも重要な存在として見なされていたことも言及される。Cunda が仏陀を供給する程の裕福な身分にあったこととも加味すると、往時の鍛冶屋は社会の中でそれなりに重要な地位に位置していたことが推察される。

本稿では、「鍛冶屋」のみについて扱ったが、パーリ聖典には、金属や冶金に関わる言及はヴェーダ文献と比較すると、数多く存在する。そういった一連の用例の分析は、ヴェーダ期の物質文化の理解に資する可能性を秘めていると言える。筆者はこれまでにヴェーダ文献における金属に関して、一通りの研究を進めているが、検証対象をパーリ聖典にまで拡大することにより、紀元前一千年紀頃の南アジアにおける物質文化に関わる更なる知見が得られる可能性

は、十分に見込まれるだろう。

付記

日本学術振興会科学研究費補助金若手研究 (B) (課題番号 17K13329) の成果の一部。

【参考文献】

- Amano, K. 2009. *Maitrāyaṇī Saṃhitā I-II: übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa*. Hempen, Bremen.
- 天野恭子, 2018. 「ヴェーダ文献に見られる雌牛崇拜の萌芽」, プラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性 第4回シンポジウム (発表用パワーポイント)
- Böhtlingk, O. und Roth, R. 1855-1875. *Sanskrit-Wörterbuch*. 7 Bde. St.Petersburg (Rep. Delhi 1990) (PW).
- Falk, H. 1994. “Die Kosmogonie von RV X 72.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 38. Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien: pp.1-22.
- Geldner, K. F. 1951. *Der Rig-Veda. Aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen*. 3 Bde. Cambridge, Mass. (Harvard Oriental Series 33, 34, 35)
- Gotō, T. 1987. *Die “I.Präsensklasse” im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpräsentia*. Wien.
- 後藤敏文, 2014. 「インド・アーリヤ諸部族のインド進出を基に人類史を考える」東洋大学国際哲学研究センター 『国際哲学研究』3 (2014), pp.43-57.
- Grassmann, H. 1872-1875. *Wörterbuch zum Rig-Veda*. Leipzig
- Macdonell, A. A. and Keith, A. B. *Vedic index of names and subjects*, London, 1912
- Mayrhofer, M. 1992-2001. *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen (EWAia)*. 3 Bde. C. Winter, Heidelberg.
- Mylius, K. 1977 “Sanskritischer Index der jungvedischen Namen und Sachen” *Ethnographisch-Archäologische Zeitschrift* 18
- Mylius, K. 2000 *Das altindische Opfer: ausgewählte Aufsätze und Rezensionen: mit einem Nachtrag zum “Wörterbuch des altindischen Rituals”*. Wichtrach: Institut für Indologie.
- Mylius, K. 2019. *Wörterbuch altindoarischer geographischer Namen* (Beiträge zur Kenntnis südasiatischer Sprachen und Literaturen, 31), Harrassowitz.
- 大島智請 2008. ヴェーダ祭式におけるアグニシュトーマ祭の潔斎思想: ヤジュルヴェーダ・サンヒターのプラフマナを中心に. 大阪大学 (博士論文)
- Rau, W. 1974. *Metalle und Metallgeräte im vedischen Indien*. Verlag der Akademie der Wissenschaften und der Literatur, Mainz.
- Rhys Davids, T. W. and Stede, W. 1855-1875. *The Pali Text Society’s Pali-English dictionary*, Oxford (PED).

- Sakamoto-Goto, J. 1985. “Das Verbaladjektiv von dh̄mā im Mittelindischen.” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, Bd.44 [Festgabe für Karl Hoffmann 1.] : pp.171-189.
- 阪本 (後藤) 純子, 1994. 「髪と髭」, 日本仏教学会年報, 第 59 号, pp.77-90.
- Syed, R. 1992. Die Flora Altindiens in Literatur und Kunst. Phil. Diss. München 1990. [Unveränderter Nachdruck 1992]
- Witzel, M. and Gotō, T. 2007 *Rig-Veda : das heilige Wissen. Aus dem vedischen Sanskrit übersetzt und herausgegeben von Michael Witzel und Toshifumi Gotō ; unter Mitarbeit von Eijirō Dōyama und Mislav Ježić*. Verlag der Weltreligionen, Frankfurt am Main (*WG-RV*).
- Yamada, T. 2018. “On Base Metals in Vedic Literature.”, *Iron Age in South Asia. Edited by Akinori Uesugi*. Research Group for South Asian Archaeology, Archaeological Research Institute, Kansai University.
- 山田智輝 2019 「ヴェーダ文献における貴金属類 (*hiranya-*)」, 待兼山論叢第 53 号哲学篇, pp.1-24.

註

- 1 ヴェーダ文献関連の略号については、別途記載のものを除き、日本印度学仏教学会ホームページ掲載の「ヴェーダ文献学関係略語および書誌一覧 2018 年 8 月 27 日版」(<http://www.jaibs.jp/wp/wp-content/uploads/2018/08/veda20180827.pdf>) に従う (2020 年 3 月 17 日に閲覧)。
- 2 Cf. 後藤 (2014), p.52 ; 56。
- 3 *EWAia* I, p.318 (s.v. *kārmārā-*) : “m. Schmied (RV+) ; *kārmārā-* m. dss . . . Ableitung von *kāрман-* ; AiGr II 2,286. . . . Letztlich **karmar-* (heteroklitische neben *kāрман-*) erweisend (Bur, Skr 141, 154, s. W. Wüst, *Pñma* 4 [1958] 139 f. Anm. 36)?”
- 4 Cf. Sakamoto-Goto (1985), pp.174-176, Falk (1994), p.5, Gotō (2004), pp.416 f.
- 5 Cf. 山田 (2019), pp.4-6. RV において金は、牛、馬、衣服等と並び、戦利品の代表格としてしばしば描かれる。
- 6 アーリヤ社会の外に置かれる、*dāsa* 出身の民のこと。Cf. *EWAia* II, p.47.
- 7 Cf. *EWAia* II, p.140
- 8 Cf. Gotō *WG-RV* I, p.838.
- 9 Cf. Mylius (1977), p.491 及び (2000), p.148.
- 10 マツラ国の一地名。現在のウツタルプラデーシュ州にある。Cf. Mylius (2019), p.35.
- 11 *Pāvā* と同じく、マツラ国の一地名。Cf. Mylius (2019), p.22.
- 12 Cf. *PED*, p.724 : “[abstr. fr. *śuc*, **śaucya-*] purity”
- 13 仏教徒以外が用いる水差しのこと。パーリ聖典では、バラモンである *Sundarikabhāradvāja* の持ち物として登場する (cf. *PED*, p.189). *EWAia* I, p.350 によると、語源は不詳とされる。
- 14 OIA *śīpāla-* (RV +). *Vallisneria spiralis* (トチカガミ科セキシヨウモ属) に相当するとされる。Cf. *EWAia* II, p.643.
- 15 Cf. SN IV 312 に同様の記述あり。

- 16 以下の用例における *māṣakamaṇḍalu-* という複合語が、同語の初出である。KS XXXVII, 1 (37.1 : 85.2-4) *hiranyaṃ brahmaṇe dadāti. tejas tena parikrīṇāti.tisṛḍhanvam | rājanyāyaujas tena parikrīṇāti | aṣṭrām | vaiśyāya puṣṭiṃ tena parikrīṇāti. māṣakamaṇḍalum | śūdrāyāyus tena parikrīṇāti.* 「金をバラモンに与える。それによって、威光を買うことになる。三つの矢を持つ弓を王族に [与える]。それによって肉体力を買うことになる。突き棒をヴァイシュヤに [与える]。それによって繁栄を買うことになる。豆を伴う器 (cf. *EWAta* I, p.305. s.v. *kamaṇḍalu-*) をシュードラに [与える]。それによって寿命を買うことになる。
- 17 Cf. 小磯 (2015)。
- 18 祭式概要については、天野 (2018) を参照。同氏には、当祭式についてご教示頂いた。この場を借りて御礼申し上げます。
- 19 *Poa cynosuroides* (cf. *EWAta* I, p.379). イネ科の植物のこと。
- 20 *sūryāgnī dyāvāpṛthivī ūro antarikṣāpa ośadhayās |* 「太陽と Agni よ、天と地よ、幅広い中空よ、水たちよ、益草たちよ。」当箇所は、*dīkṣā* の *āhavanīya* 祭火の側に座る場面で用いられる *mantra* である (cf. 大島, diss., p.216)。
- 21 *dīkṣā* については大島, diss. が包括的に扱う。
- 22 Cf. *PED*, p.128 (s.v. *ujjhāyati*).
- 23 指二本分の長さまでの頭髮が許可されていたことを背景とする。Cf. 阪本 (後藤) (1994), p.80 f. 「剃髪するためには許可を取れ」ということか。なお、前後の文脈では、出家させてはならない者について述べられるが、当箇所との関連性は見出されない。
- 24 「相応の価格で」の意 (cf. *PED*, p.540)